

初期映画史から見る映画映像の真偽問題 「ニュース」というコンテキストのもとに（要旨）

小松 弘

「ニュース」という概念が映画の歴史の中に入ってくるのは、極めて早い段階ではあったが、最新の出来事を映画カメラによって記録し、できうる限りその出来事を早く映画館で上映するという制度が整うのは、映画がフィルムとしてもシネマとしても制度化してからのことだ。具体的には 1909 年以降のことである。フランスのパテ・フレールがパテ・ジュールという名称のもとに、週替わりのニュース映画を映画館で上映し始めたのが始まりだ。しかしもちろんそれ以前も、同時代的に世間をにぎわした出来事、のちには世界史的な出来事に組み込まれることになる主題は、映画に撮影され、たとえ映画館がない時代であったとはいえ、演芸場や仮設の見世物小屋で、ニュースとしての性格を与えられて観客たちに受け止められていた。これを括弧つきの「ニュース」として仮に捉え、ニュース映画が成立する以前にこの括弧つきの映画における「ニュース」が映画映像の真偽の問題にどう関連するのかについて考えてみるのが、この発表の狙いである。

問題を単純化するため、一つの国で見てみる。初期の映画史において活発に映画を製作していたフランスの場合を取り上げる。例えばリュミエール社が発行したほぼ最後の時期にあたる 1903 年の映画カタログ。撮影当時おそらくもっともニュースという概念に近い光景であった 1900 年のパリ万博の映像は、第 9 類の「フランスおよびフランス植民地旅行」の中に分類されている。一方、現代のニュースの概念に比較的近いと思われるのは、第 11 類の「公的行事」という名称のもとに分類された映像で、各国の元首、王族らの公的な行事を記録した映像である。だがこのリュミエールの場合も、またパテやゴーモンやエクリプスなどその他のフランスの初期映画製作会社が発行した 1907 年以前の映画カタログにもアクチュアリテ、すなわちニュースという言葉は確認されない。

19 世紀の段階で、スタジオ内で撮影された戦争映画を撮影したジョルジュ・メリエスは、魔術師であった。また 19 世紀末の著名な魔術師の幾人かが映画に関心をもち、映画撮影を行った魔術師すらいたことが知られている。偽りを真のように見せるのが魔術師の仕事であるなら、このような戦争映画は真偽判断を宙づりにする効果を持っていたともいえよう。メリエスはこの後も、ドレフュス事件の連作映画、さらにはイギリスのアーバン社からの注文仕事であったエドワード 7 世の戴冠式など、戦争の主題以外でも、歴史に組み入れられるであろう出来事をほぼニュース映画のような概念でもって、スタジオ内で撮影した。

これらのニュース映画は、確かに現場で撮影されたものではなく、言語による報道やイラストによる報道に基づいて再構成された、いわば作り物であり、映画史において一般的にフェイク、もしくはフェイク・ドキュメンタリーと呼ばれている。こうした映像が当時としてはニュース映画としての価値を持ちえたのは、真偽判断がここですら宙づりにされるからだ。

別の言い方をすれば、観客にとって、スクリーン上の動く写真映像である映画が真であるか、偽であるかという問題は 20 世紀の初めまではほとんど成立しなかったと言えよう。真偽判断が問題となるのは、映画が制度として社会的に確立する 1907 年以降のことであろう。

真偽判断を宙づりにして作られた偽の戦争場面に引き付けられていた多くの観客たちの映画への接し方は、映画史ののちの時代のスペクタクルとしての映画に引き付けられる観客たちの態度と変わることはない。例えば映画が政治プロパガンダに利用される例をわれわれは映画史の中でたびたび目撃するが、そうした映画を見る観客の大部分は、初期の映画にあった映像の真偽判断の宙づりという、あの状態の中に存在しているのである。